

## スペイン語の所有表現に関する認知言語学的考察

田林 洋一

### Un estudio sobre las expresiones de posesión del español desde la perspectiva de la lingüística cognitiva

Tabayashi, Yoichi

#### Resumen

Este estudio tiene por objeto considerar las expresiones posesivas desde la perspectiva de lingüística cognitiva, especialmente desde el punto de vista del modelo de “punto referencial” (Langacker, 1991, 1993).

En primer lugar, consideramos el comportamiento del adjetivo posesivo prenominal y posnominal y se observa la diferencia entre ellos. Aquél funciona como “primer punto referencial” y éste funciona como “segundo punto referencial”. El adjetivo posesivo prenominal tiene el poder de determinar el ámbito de cognición, mientras que el posnominal no lo tiene, sino que limita o reduce el ámbito de cognición ya dado.

Las frases introducidas por la preposición DE tienen la misma función y el sentido de adjetivo posesivo posnominal. Observamos cuáles son las condiciones de sustituir adjetivo posesivo pronominal por las frases introducidas por la preposición DE.

Finalmente consideramos el comportamiento del dativo posesivo y señalamos su similitud en función con el artículo definido que indica posesión.

## 1. 序

本稿ではスペイン語の所有表現を認知言語学的な視点から考察することを目的とする。まず、スペイン語の所有表現について以下を参照。

(1)a. Su trono estaba chapado de oro.

b. Esta hija tuya es inteligentísima.

Picallo & Rigau(1999:975)

(2)a. El perrito era de la niña.

b. El perrito era suyo.

RAE(2009:1337)

(3)a. El barbero le afeitó el bigote.

b. Las piernas se me doblaron.

(4)a. La cómoda tiene seis cajones.

b. En la cómoda hay seis cajones.

c. Una cómoda con seis cajones.

d. Pedro posee una cómoda modernista.

e. La cómoda modernista pertenece a Juan.

Picallo & Rigau(1999:975)

(1) は所有形容詞 (adjetivos posesivos) を用いて所有ないしは帰属関係を表す用法で、(1a) は無強勢形 (átono) であり前置形所有形容詞 (posesivo prenominal、以下「前置形」とする) または短縮形 (formas apocopadas) と呼ばれる。一方、(1b) は強勢形 (tónico) であり、後置形所有形容詞 (posesivo posnominal、以下「後置形」とする)、または完全形 (formas plenas) と呼ばれる (江藤 (2003 : 110-111) 参照)。

(1) の用法は所有・帰属関係を表すのに最も頻繁に用いられる表現であるが、(3) のように与格所有詞 (dativo posesivo) を用いることでも表すことができる。(3a) では、髭 (bigote) の所有者が与格代名詞 le によって示されており、同様に (3b) では足 (piernas) の所有者が与

格代名詞 *me* によって示される。(2a) は *de* によって導かれた前置詞句を用いて所有関係 (子犬 (*perrito*) は女の子 (*la niña*) の所有物である) を表す用法で、(2b) のように後置形 *suyo* に代替可能なことがある。(4) は動詞及び前置詞に内在的に「所有」という意味が組み込まれており、それぞれ (4a)、(4b) 及び (4c) はタンズ (*cómoda*) に 6 つの引き出し (*seis cajones*) が帰属している例、(4d) 及び (4e) はそれぞれ *Pedro* 及び *Juan* にタンズが帰属していることを表すものである。

それぞれ所有・帰属の意味の担い手は形容詞 (1)、前置詞 *de* (2)、格 (3)、動詞及び前置詞の意味的要素 (4) と様々である。本稿では (1) ~ (3) に焦点を当てて認知言語学的な考察を行う。次節では「認知言語学的」とはどのような捕らえ方を指すのか、若干の解説を行う。

## 2. 認知言語学的背景

認知言語学とは、*Lakoff & Johnson (1980)* を契機に、当時言語研究を席卷していた伝統的生成文法のアンチテーゼとして爆発的に広まった言語学の一分野である。しかし、その実態は生成文法のように強固な一枚岩となる理論に則ったものというより、各研究者が各々の立ち位置を微妙に変化させて言語現象を認知的に分析するという複数の理論の集合体として機能していると考えるのが妥当である。その中でも、*Langacker (1991)* の参照点構造モデル (*reference-point structure model*) を用いて本稿の議論を進めていく。参照点構造とは、概念化者 (*conceptualizer: C*) が目標物 (*target: T*) を同定する際に別の要素を参照点 (*reference point: R*) として手がかりにするという人間の認知体系をモデル化したものである。この概念はいわゆる換喩 (*metonymia*) や部分喩 (*partonymia*) とも近い。

(5) シェイクスピアは面白い。

(6) *Las canas anduvieron allí.*

(5) では「シェイクスピア」という人名を足がかり (即ち参照点)

として、目標物である「シェイクスピアの一連の作品」に言及している表現であり、(6)では白髪 (canas) という身体の一部を参照点として、「老人」という全体に言及している表現である (なお、(6)は身体の部分から人間全体を指し示しているという点で、部分喩の解釈も可能である)。この認知モデルの処理は、その抽象性の高さゆえに無自覚で行われることが少なくない。

さて、Langacker (1993) や早瀬 (2002) は、この参照点構造は全ての所有表現の根底に共通して存在するスキーマとして論述しているが、主としてその対象は英語の所有格表現、特に-'s を伴った所有表現 (e.g. John's father) に限定されている。本稿では、参照点構造モデルによって、英語の所有格表現のみならずスペイン語の所有表現、特に (1) ~ (3) で挙げた所有表現を分析しうる可能性があることを示唆したい。

### 3. 所有形容詞による所有表現

#### 3.1 前置形所有形容詞

前置形は、対象となる名詞の前に置くことで所有・帰属関係を表す形式であり、性数が一致するもの (nuestro, vuestro) と数が一致するもの (mi, tu, su) がある。

(7) a. Nuestros amigos vienen a cenar.

b. Publicaron tu traducción.

Picallo & Rigau (1999 : 976)

(7a) は nuestros を参照点、amigos を目標物としてとらえる。即ち、聞き手が nuestros という語を認知した際、聞き手は「私たちに対して所有・帰属関係を持つ、複数の男性名詞」という認知支配領域 (cognitive domain) を構築する。そして、nuestros によって限定された目標物 (この限定が即ち参照点の機能でもある) の中から、後続する名詞句 amigos によって、目標物を正しくとらえることが可能となる。(7b) も同様に、

所有形容詞 *tu* を参照点、*traducción* を目標物としてとらえるが、聞き手が参照点によって得られる認知支配領域は (7a) よりも広い (即ち、限定される度合いが低い)。これは、(7b) の *tu* が数のみの情報しか持たないのに対し、(7a) の *nuestros* は後続する名詞句の性数の情報を同時に含むからである。

前置形は基本的に指示詞や冠詞と共起できない一方、量化詞の場合には、前置形の後に出現する時に共起される可能性がある。

- (8) a. \*El mi libro.  
b. \*Un mi libro.  
c. ?Este mi libro.  
d. \*Mi este libro.  
e. \*Mi libro este.
- (9) a. \*Algún mi libro.  
b. \*Mi algún libro  
c. \*Muchos mis libros.  
d. Mis muchos libros.  
e. \*Pocos mis libros.  
f. Mis pocos libros.  
g. \*Tantos mis libros.  
h. ?Mis tantos libros.  
i. \*Tres mis libros.  
j. Mis tres libros.

(8a) は定冠詞、(8b) は不定冠詞、(8c)、(8d) 及び (8e) は指示詞と前置形が共起できないことを示している。これは参照点構造として機能する前置形が限定する力を持つため、更に先行して限定の機能を持つ要素を持つことができずに不適格になるためである。なお、(8c) が容認されることもある理由は、直示的な指示詞が最初に与えられた際、その認知支配領域が定まることがないと判断されるため、改めて前置形 *mi*

によって領域を決定することができるからであろう<sup>1</sup>。(9)は量化詞と前置形が共起するかどうかを調べたものである。全称的量化詞 *alguno* (後続する名詞が男性単数 *libro* なので、*algún* として具現化) が出現する (9a) 及び (9b) は、その位置に関係なく非文となる。これは、*algún* が不定冠詞 *un* と似た意味を持つことに由来すると思われる。

(9c) ~ (9f) は量化詞 *muchos* と *pocos* の分布を調べたものである。ここから分かるように、量化詞が前置形の前に置かれた時は非文となるが、量化詞が前置形の後に置かれた場合には容認される。これは、前置形よりも量化詞の方が狭める範囲が狭い (即ち、作用域が狭い) ことを示している。本稿の術語を用いると、認知支配領域を決定する際に、量化詞の方が限定される認知支配領域が小さいという事になる。(9g) 及び (9h) も、同様に量化詞 *tantos* を用いてインフォーマントチェックを行ったが、前置形が前に来た (9h) は容認度がやや下がる。これは、例えば机の上に本が山と積まれている状況で (9g) を発話すれば容認される。数詞も量化詞と同様の振舞いを見せることから ((9i) 及び (9j))、数詞は量化詞と似た認知支配領域を持つことが示唆される<sup>2</sup>。

この参照点構造に因る指示性は等位接続を許さない。

(10) a. \**Su y mi amigo.*

b. \**Nuestros y vuestros familiares*

RAE (2009 : 1349)

(10a) が不適格な理由は、先に *su* で認知支配領域が決定された直後に別の認知支配領域 *mi* が出現しているからである。(10b) の不適格性も同様の理由による。

以上のように、前置形は限定性が強く、参照点として働く場合にはその限定する領域がかなり狭められることが分かる。次節で述べる後置形は、前置形に比べてその制約が緩い。

### 3.2 後置形所有形容詞

後置形は、対象となる名詞の後ろに置くことで、所有・帰属関係を表す形式であり、如何なる人称の後置形でも名詞との間に形態的に性数一致の現象を見せる。

- (11) a. El libro nuestro.
- b. Tantas hazañas vuestras.
- c. Este hijo mío.
- d. Una traducción tuya.
- e. Dos casas tuyas.

Picallo & Rigau (1999 : 990)

後置形の特徴は、前置形とは異なり冠詞や指示詞などとの共起を許容する点にある。それぞれ、(11a) は定冠詞、(11b) は量化詞、(11c) は指示詞、(11d) は不定冠詞、(11e) は数詞と後置形が共起する。後置形は名詞の後に続く統語的特徴を持つため、言語の線状性により、聞き手はまず名詞の存在を認知する。即ち、参照点として機能するのは名詞の前にある要素であり、それから目標物である名詞句が同定される。しかし、聞き手にとってこの同定は談話情報の観点からその帰属者ないしは所有者が明示されていないという点で不足しているために、後置形が二次的参照点とでも呼びうる機能によって所有の意味を当該名詞句（目標物）に付与するという認知プロセスを辿る。

二次的参照点は修飾的な性質を持つため、後置形がなくとも句（あるいは文）は適格となる。

- (12) a. El libro.
- b. Tantas hazañas.
- c. Este hijo.
- d. Una traducción.
- e. Dos casas.

(11) と (12) が意味するところは以下の通りである（ここでは紙幅の都合上、(11a) と (12a) のペアに絞る）。即ち、参照点構造において、まずは名詞の前の要素、即ち定冠詞 *El* が参照点として機能する。ここで定性という足がかりを得た聞き手は、次に続く名詞 *libro* を具体的な目標物としてとらえる。ここで話し手と聞き手の間に完全な情報の交換、言うなれば十分な情報の伝達とコミュニケーションが成立する場合、(12a) が示すようにそれ以上の情報を付与する必要はない。しかし、話し手と聞き手の情報量の不一致（情報量の非対称性）が存在すると話し手が判断する場合、話し手は一次的参照点によって決定された聞き手の認知支配領域を更に狭める（ないしは同定する）ために更なる要素、即ち後置形 *nuestro* を付与し、聞き手の同定対象（認知支配領域）を更に狭めて聞き手の理解を助けるというプロセスを経ることになる。換言するならば、一次的参照点である定冠詞 *El* だけでは、目標物 *libro* に到達するための足がかりが不足している（即ち、認知支配領域が広すぎる）ということになる。以下、(11b) ～ (11e) と (12b) ～ (12e) のペアも同じ情報処理過程を辿る。

情報処理が線状的に行われるということは、既に Kimball (1973) や磯部 (2009) が指摘している。Kimball は自然言語の処理はトップダウンで行われるというトップダウンの原則 (*top-down principle*) を主張した。この原則によると、話し手は統語構造の一番高い所にある *S* を出発点として、構造の低い方へと解析する。例えば、*Juan tiene este libro.* という文において、まず聞き手は *Juan*、次に *tiene* を解析する。そして *este libro* という名詞句は、*Det-Noun* という構造を持つため *este* を解析した後に *libro* を解析する。このトップダウンの原則により、多重埋め込み文などが説明可能となる。

ここで取り入れた二次的参照点機能を持つ後置形は、名詞の省略及び等位接続の許容も同時に説明しうる。まず、名詞の省略について考察する。



(13) a. Este tipo de caligrafía parece la suya.

b. Buscábamos uno vuestro.

Picallo & Rigau (1999 : 992)

(13a) に出現する所有表現 *la suya* において、まず定冠詞 *la* が参照点として機能し、聞き手の認知支配領域を決定する。そして、目標物である *caligrafía* を同定するが、これは文脈（既に先行した名詞として出現している）によって省略される。その後、聞き手の認知支配領域を狭めるために二次的参照点として *suya* が導入され、最終的な聞き手の同定作業が完了する。(13b) の認知処理も同様のプロセスを経る。

この時、前置形と異なり後置形で名詞の省略が許容されるのは、前者が一次的参照点として前置形を導入する際に後続する情報を補う必要があるため、目標物（名詞）の省略ができないが、後者は一次的参照点として名詞に先行する要素があり、更に二次的参照点によって名詞に後続する後置形が出現可能である（即ち、後置形は文字通り二次的である）からと思われる。

なお、山田（1995 : 191）は、後置形の出現によって許容される名詞の省略を「定冠詞を伴って代名詞として働く場合（所有代名詞）」があると説明するが、本稿では代名詞的な機能を後置形に認めた上で、いたずらに機能を増やすことをせずにあくまで認知処理のプロセスからの説明を試みた。

名詞の省略は (14a) や (14b) が示すように前置形では許されない。

(14) a. \*Este tipo de caligrafía parece su.

b. \*Este tipo de caligrafía parece la su.

cf. Este tipo de caligrafía parece la suya.

c. \*Este tipo de caligrafía parece la su caligrafía.

(14c) が非文の理由は、先の認知支配領域の決定が、定冠詞 *la* と前置形 *su* という、二つの参照点を同時に持つからであろう。前置形がい

わば一次的参照点としてしか機能しないのに対し、後置形が二次的参照点（即ち、ある与えられた認知支配領域を再び決定する）としての機能を持つ証左は、以下の例からも明らかである。

(15) a. Carmen encontraba a sus alumnos por todas partes.

b. Carmen encontraba a alumnos suyos por todas partes.

山田（1995：194 一部改）

(15a) はカルメンがどこへ行っても自分の「生徒全員に出会った」と解釈されるのに対し、(15b) は、カルメンがどこへ行っても自分の「生徒のうちの誰かと出会った」と解釈される。即ち、(15a) の sus は認知支配領域を一度決定したら、その範囲内の全ての成員を限定するという定性の意味を持つのに対し、(15b) の suyos は不定の意味を持ちうる。換言するならば、前置形はその認知支配領域において「固定的」かつ「不変」なのに対し、後置形は「可變的」である。よって、後者はある与えられた認知支配領域内で、更に同定の作業を経るという二次的参照点の機能を持つことができる。

後置形が持つ認知支配領域を狭めるという二次的参照点の機能は、量化表現の作用域にも影響を及ぼす。

(16) a. Cada profesor examinará a sus alumnos.

b. ?Cada profesor examinará a los alumnos suyos.

c. Cada profesor examinará a los suyos.

(16a) は前置形が持つ認知支配領域の定性ゆえに「各々の教師が（自分自身の）生徒を試験する」という、cada が sus をその作用域内にとらえる解釈しか存在しない。しかし、(16b) では los alumnos suyos が cada の作用域に入ることができず、cada と sus は束縛の関係にはない<sup>3</sup>。従って、(16b) を適格にするには Cada profesor examinará a los alumnos suyos en dos ocasiones. (Picallo & Rigau (1999 : 1000)) のように、

en dos ocasiones という分布的な解釈を認めるような状況を作り出さなければならぬ<sup>4</sup>。名詞を省略した (16c) では、los suyos は cada の作用域内に入り、論理の変項として振舞う。(16) が意味するのは、cada がある確定的な意味を持つ場合 (ちょうど一次的参照点機能によってその目標物が明確に定められている場合) にはその作用域に所有形容詞の存在を許すが、後置形のように二次的に与えられた認知支配領域を狭める働きをする場合 (即ち、対象が定性を持つ持たないにかかわらず、認知支配領域において決定されておらず不特定な場合)、cada は所有形容詞をその作用域内に収めないということである。

さて、(13) の名詞省略の構文的拡張に、以下の用法がある<sup>5</sup>。

- (17) a. Esta pluma no es mía.
- b. Esta pluma no es la mía.

(17a) には目標物となる具体的な名詞及び一次的参照点となるその他の要素が出現していない。つまり、後置形の二次的参照点としての機能と、所有・帰属関係の意味が同じ語 *mía* に内包されて述部となっている。これは、(13) の名詞の省略が名詞の前に置かれる要素にまで及んでいるためである。(17b) は後置形における単なる名詞の省略であり、ここでは構文的拡張とは呼べない。

後置形が持つ二次的参照点の更なる構文的拡張として、後置形は存在を表す文や量化詞で用いることが出来るという点が挙げられる。

- (18) a. Había (varios / algunos / unos / pocos / bastantes) objetos suyos en la alacena.
- b. Hay acuarelas tuyas por toda la casa.
- c. Me pregunto qué libro suyo habrá hoy en el escaparate.

Picallo & Rigau (1999 : 992)

(18a) は存在量化詞と後置形が共起することを表したもの、(18b)

及び (18c) は存在文に後置形が出現することを表したものである。これらの例文でも二次的参照点である後置形が量化的な認知支配領域を限定するという働きを持つ。

#### 4. 前置詞 de に導かれる所有表現

前置詞 de に導かれて出現する表現は、所有・帰属関係の他に動作主や主題、経験者などを表すことができ、更に前置形で代用することが可能なものもある<sup>6</sup>。

(19) a. El libro de Juan.

b. Su libro.

(20) a. La manipulación de Juan.

b. Su manipulación.

(21) a. El traductor de esta novela.

b. Su traductor.

それぞれ、(19) は所有、(20) は動作主、(21) は主題関係を表し、de 前置詞句は前置形に置き換えることが可能である。しかし、この置き換えは三人称の前置形の su に限られ、一人称の前置形 mi 及び二人称の前置形 tu は容認されない。

(22) a. \*Mi libro de mí.

b. \*El libro de mí.

(23) a. \*Tu libro de ti.

b. \*El libro de ti.

(24) a. Su libro de él.

b. El libro de él.

#### 四九

(22) 及び (23) が不適格なのに対し、de 前置詞句が三人称ないしは前置形が su である (24) は適格である。これは、前置形 su が持つ指

示領域が広いことが原因であろう。即ち、su libro は潜在的に曖昧であり、el libro de él, el libro de ella, el libro de usted, el libro de ellos, el libro de ellas, el libro de ustedes のいずれも指す可能性がある。更に、de 前置詞句は所有形容詞と置換する際にいくつかの制約がある。

(25) a. La mayoría de ellos.

b. \*Su mayoría<sup>7</sup>.

(26) a. Me preocupaba por el beneficio de ellos mismos.

b. #Me preocupaba por su beneficio.

(27) a. Debajo de mí.

b. \*Mi debajo.

c. ?Debajo mío.

それぞれ、(25) は先行する名詞が部分を表し後続する de 前置詞句が全体を表す場合、(26) は所有を表す de 前置詞句が強調されている場合 (mismos の出現による強調)、(27) は前置詞を用いた慣用表現の場合には所有形容詞との de 前置詞句との置換は非文であるか (27b)、有標性が高い (27c) (詳しくは山田 (1995 : 196-197) 及び Picallo & Rigau (1999) を参照)。本稿では、参照点構造という理論的枠組みを用いて、上述の①三人称のみに許される場合 (22) ~ (24)、②部分と全体の場 (25)、③所有形容詞の強調 (26) の分析を試みる。

#### 4.1 三人称のみに置換可能なケース

前述の通り、一人称及び二人称の de 前置詞句を伴う所有表現は不可能であり、三人称の場合は容認される。これは、前置形 mi 及び tu が更に de 前置詞句を伴うと、経済性の原理に違反するからである。即ち、話し手が mi libro 及び tu libro と発話した時点で、聞き手はその一次的参照点構造からただちに認知支配領域を決定することができる。しかし、su の場合は複数 (具体的には六つ<sup>8</sup>) の認知支配領域が別個に構成されるため、後続する名詞句 libro が誰と (あるいは何と) 所有・帰属関係

を持つのが曖昧である。この曖昧性を防ぐために複数出現した認知支配領域を決定する役割として de 前置詞句が参入することになる (24a)。

(24b) の場合、聞き手はまず定冠詞 el の一次的参照点機能によって同定された認知支配領域を想定する。次に、目標物となる libro が決定されるが、目標物が談話資源内に複数存在するため、その所有者を明らかにするための二次的参照点が必要となる。この時、de mí と de ti、de nosotros と de vosotros が不可能な理由は、既に形態的に経済的な前置形 mi, tu, nuestro 及び vuestro を持っているためと考えられる。

#### 4.2 部分と全体の関係が置換不可能なケース

部分が名詞となり、全体が de 前置詞句で表される場合は、de 前置詞句の所有形容詞による置換は不可能になる。これは 2 節で論じたように、部分と全体のパートニミー及び換喩の場合に参照点構造が成立することを考えると一見奇妙である。しかし、部分と全体の関係では、前置形と de 前置詞句を置換することが不可能なケースの方が稀である。

(28) a. Los ojos de Juan.

b. La cabeza de Carmen.

(29) a. Sus ojos.

b. Su cabeza<sup>9</sup>.

(30) a. Muchos de ellos.

b. Pocos de nosotros.

(31) a. \*Sus muchos.

b. \*Nuestros pocos<sup>10</sup>.

(28) 及び (29) が示すように、部分と全体を示す身体部位名詞が目標物となっても前置形との置換が可能である。この時、(28) と (29) の意味の相違は、前者が一次的参照点として定冠詞が用いられ、目標物である名詞にアクセスされた後、二次的参照点 Juan 及び Carmen が対象をさらに狭めるという認知的プロセスを経るのに対し、後者ははじめ

から参照点 *sus* 及び *su* があらかじめ後景として認知支配領域をすでに決定し、後に目標物にアクセスするという処理を経る。いわば、あらかじめ与えられたフレームが決定されているという点で、所有形容詞の意味は地 (*ground*)、目標物は図 (*figure*) の関係になっていると言える。

(30) 及び (31) は置換が不可能なケースである。(30) で一次的参照点として機能するのは量化表現 *mucho* 及び *poco* である。この量化表現によって、いったん目標物が存在しうる認知支配領域が決定され、その後、「部分」という意味が目標物となってから、二次的参照点として機能する *de* 前置詞句によって対象が最終的に決定される。しかし、(30a) の *de ellos*、(30b) の *de nosotros* をそれぞれ所有形容詞に置換した (31a) 及び (31b) は非文となる。これは、(9) で見たように、量化詞の前に前置形が来たとしても、後続する名詞句が必要という事を示している (*mis muchos libros.* は適格だが、\**mis muchos.* は非文。同様に、\**muchos mis libros.* も非文)。従って、(30) の *muchos* と *pocos* は、量化詞であると同時に、代名詞的な性質を持つために容認されると思われる。

#### 4.3 所有形容詞の強調が置換不可能なケース

所有・帰属関係が強調される場合には、①前置形の使用が基本的に適さないということ、②後置形が容認されうること、③*de* 前置詞句との置換が不可能なこと、がその特徴として挙げられる。

①のケースに対する説明に、前置形の内在的特性に強調の意味がないことが挙げられる。1 節で、前置形は無強勢であると述べたが、それは音声的にも意味的にも対応しうる。即ち、前置形は常に後景としてしか存在せず、談話において地の位置しか占めることがない。(26a) において所有の意味を強調する *mismo* が出現している時点で、(26b) のように前置形が出現することは原理的に排除される。参照点構造モデルでは、一次的参照点として機能する前置形は後景化しているため、それを強調する語句が共起することはない。

一方、②のケースでは、まず目標物の前に置かれている要素が一次的

参照点として機能し、後景化している（即ち、地となっている）。そして、後置形は後続する名詞句である目標物を更に焦点化するという機能を持つ（これが二次的参照点の機能である）。従って強調の意味が文脈的及び明示的に出現した場合も許容される。以下の例文を参照。

(32) -He estado con su hermano.

-¿Con el mío?

-Sí, con su hermano de usted.

cf. ?- Sí, con su hermano.

cf. ?- Sí, con el hermano de usted.

（指し示しながらの状況では可）

Hernández Alonso (1970 : 307)

(32) の第一文は所有形容詞 *su* が後景化されている。しかし、第二文及び第三文で所有の意味が前景化された際には前置形のみで所有者を表すことは許されず、後置形の出現が義務付けられるか（第二文）、*de* 前置詞句の出現が要求される（第三文）。

③のケースも同様に、*de* 前置詞句は二次的参照点の機能を持つと述べた。従って当該意味を強調することが可能であり、強調の語句が文脈的及び明示的に出現した場合も許容される。

#### 5. 与格所有詞による所有表現

与格所有詞 (*dativo posesivo*) については既に 1 節で述べたが、改めて以下の文を参照のこと。

(33) a. Me duele la cabeza.

b. Juan se lava los dientes.

(33a) は与格代名詞 *me* によって *cabeza* の帰属者が表されている例、



(33b) も同様に再帰形代名詞 *se* によって *dientes* の帰属者が表されている例である。このように、所有・帰属関係が表される与格代名詞を「与格所有詞」と呼ぶ。与格所有詞が出現した場合、その帰属の対象となる目標物は、それが限定されている限り定冠詞以外の要素を名詞の前に持つことができない<sup>11</sup>。

- (34) a. \**Me duele esta cabeza.*  
b. \**Me duele tanta cabeza.*  
c. \**Me duele una cabeza.*

それぞれ、(34a) が指示詞、(34b) が量化詞、(34c) が不定冠詞を名詞 *cabeza* の前に置くことができない。この特徴は、古語的ではあるが指示詞の出現を許容した前置形と非常によく似ている。即ち、前置形と同様に与格所有詞は一次的参照点として働き、認知支配領域を決定する力を持つ。認知支配領域が決定された後、その領域内にある名詞が明示的に選択されて ((33a) の場合は *cabeza*、(33b) は *dientes*) 正しく目標物をとらえる。

与格所有詞が前置形と機能的に類似する原因には、その語順も影響している。即ち、与格所有詞を持つ言語表現 (33a) では、聞き手はまず与格所有詞 *me* を認知してから、目標物 *la cabeza* に到達する。これは、言語の線状性から前置形が先に認識されて目標物である後続された名詞句が後に認知されることと対応している。違いは前者が a 前置詞句による重複を許すが、後者は意味的な重複を許さないということである。

- (35) *A mí me duele la cabeza.*  
(36) \**Mi libro de mí tiene las cubiertas rojas.*

(35) は与格所有詞と意味的に重複する a 前置詞句 (*a mí*) の出現を許すが、(36) は前置形 *mi* と意味的に重複する *de mí* の出現を許さない (前置形 *su* の場合は前述したように例外)。

もう一つの違いとして、与格所有詞では前置形の場合と異なり、対象となる目標物が定冠詞を持つことができるという点が挙げられる。定冠詞が時に所有・帰属関係の意味を担うという点については、既に RAE (1973 : 428-429) や Picallo & Rigau (1999 : 1006-1010) が指摘している。Picallo & Rigau は、①目標物と所有者が関係付けられている時、②部分と全体の関係及び③親族名詞、に関しては時に定冠詞が所有の意味を持つとしている。

(37) a. Julián perdió la vida en aquel triste accidente.

Picallo & Rigau (1999 : 1006)

(38) a. ?Sacó su pañuelo de su bolso.

b. Sacó el pañuelo del bolso.

RAE (1973 : 428)

(39) María tiene las piernas muy bellas.

(40) a. Cuidarás a la nieta.

b. Cuidarás a tu nieta.

Picallo & Rigau (1999 : 1010)

(37) は目標物 *la vida* が *Julián* と関係付けられているので定冠詞 *la* は *Julián* との所有・帰属関係を形成する。スペイン語で前置形の所有関係を明示した (38a) はあまり好まれず、定冠詞によって目標物を導く (38b) が好まれる。(39) は部分と全体の関係を表し、わざわざ断りがなくとも (即ち前置形で明示しなくとも) *las piernas* は *María* と所有・帰属関係にあることが分かる。(40) は親族名詞に関するものであり、(40a) のように孫 (*nieta*) が定冠詞で表示されていても、(40b) と等価であることが分かる。

しかし、いわゆる関係付けが成立 (即ち、被所有物によって所有者が特定できる状況) してさえいれば、特に下位分類を立てる必要はないように思われる。即ち、近接性に基づく推論 (換喩) が成立すれば、上記以外でも定冠詞が所有的意味を持つことがある。

- (41) a. Tengo el libro.  
b. ??\*Tengo mi libro<sup>12</sup>.

(41a) は文脈により本 (libro) の所有者は主語と関係付けられていることが分かる。この時、定冠詞が所有の意味を表すのではなく、動詞 tengo が持つ意味と、libro との関連において所有という意味が語用論的 (ないしは構文的) に浮かび上がる。逆に、冗長的に mi libro とした場合は容認度が著しく下がる。即ち、先の分類は①の関係付けさえ明確であれば残りの分類は包含しうる。

以上、与格所有詞も基本的には参照点構造モデルで分析しうること、その構造は前置形と似ているが、定冠詞を持つか持たないかという点で異なり、定冠詞は時に所有の意味を持つこと、の二点を見た。

## 6. 結語

本稿では、参照点構造モデルを用いてスペイン語の所有表現、特に所有形容詞による表現、de 前置詞句を持つ所有表現及び与格所有詞について若干の考察を行った。その際、前置形は一次的参照点を持ち、認知支配領域を決定するのに参画するのに対し、後置形は二次的参照点として機能し、与えられた認知支配領域を狭める働きがある。この特性のために、前者はそれ以外の認知支配領域を決定する要素 (不定冠詞など) を持つことができず、後者はそれらの要素を持つことができることを確認した。更に、de 前置詞句はその語順ゆえに後置形と似た働きをすること、与格所有詞は前置形と似た働きをする。その際、定冠詞も所有・帰属の意味を持つことがあることを見た。

## 参考文献

江藤一郎 (2003) 『基本スペイン語文法』芸林書房。

Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.

早瀬尚子 (2002) 『認知言語学 2: 事象構造』シリーズ言語科学 2. 161-186.  
東京大学出版会.

Hernández Alonso, C. (1970) *Sintaxis española*. Valladolid.

磯部美和 (2009) 「ことばの理解のメカニズムをさぐる」大津由紀雄編  
著『はじめて学ぶ言語学 - ことばの世界をさぐる 17 章』169-190.

Kimball, J. (1973) “Seven Principle of Surface Structure Parsing in  
Natural Language” *Cognition* 2, 15-47.

Lakoff, G. & Johnson, M. (1980) *Metaphors We Live By*. University of  
Chicago Press.

Langacker, R.W. (1991) *Foundation of Cognitive Grammar 2:  
Descriptive Application*. Stanford University Press.

Langacker, R. W. (1993) “Reference-point Constructions”, *Cognitive  
Linguistics* 4, 1-38.

Picallo, M. C. & Rigau, G. (1999) “El posesivo y las relaciones  
posesivas” en Bosque, I. y Demonte, V. (dir. ) *Gramática  
descriptiva de la lengua española*. Vol.2. 973-1023. Espasa.

RAE (1973) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*.  
Espasa.

RAE (2009) *Nueva gramática de la lengua española*. Espasa.

山田善郎 (1995) 『中級スペイン文法』白水社.

---

<sup>1</sup> 山田 (1995) は、以下の例文を挙げて、指示詞と前置形の併用は古語的  
としている。

( i ) Esta su casa les ofrece una gran oportunidad de negocios.

山田 (1995 : 193)

<sup>2</sup> 以下のように、日本語や英語では前置形の振舞いが異なる。

( i ) a. 私のこの本。(cf. この私の本)

b. 私のたくさんの本。(cf. たくさんの私の本)

c. ?私の三冊の本。(cf. 三冊の私の本)

( ii ) a. \*My this book. (cf. \*This my book)

b. ?My many books. (cf. \*Many my books)

c. My three books. (cf. \*Three my books)

日本語では前置形と量化詞の順序はあまり問題にならないが、英語では前  
置形が量化詞ないしは数詞よりも後に置かれると非文となる。また、前置形

が量化詞より前に置かれている文 (ii b) も、状況次第では容認されない。

(iii) a. My many books have sold well.

b. \*There are my many books on the floor.

中間構文である (iii a) は my many books の出現が容認されるのに対し、存在文である (iii b) は容認されない。むしろ、英語では (iv) のように後置形に相当する of mine のような形を取るのが一般的である。

(iv) a. Many books of mine.

b. Few books of mine.

c. Three books of mine.

<sup>3</sup> sus が cada 以外の先行する文脈に出現した要素と同一指示で結ばれるならば、この文は適格である。

<sup>4</sup> 詳しくは Picallo & Rigau (1999 : 999-1001) を参照。

<sup>5</sup> 構文的拡張については Goldberg (1995) 他に準拠する。

<sup>6</sup> 前置形の代用規則については、①一つの前置形しか持つことができないこと、②前置形に代用された de 前置詞句は意味的に階層性があること

(POSEEDOR > AGENTE > TEMA) などの条件がある。詳しくは Picallo & Rigau (1999 : 980-989) を参照。

<sup>7</sup> En su mayoría (大部分) のように、慣用句として確立している言語表現の場合は非文とはならない。

<sup>8</sup> 先行する文や状況によって su に対応する三人称の名詞があれば、構築される認知支配領域は更に増える可能性がある。

<sup>9</sup> sus libros や su casa のように身体部位でなくとも容認されるが、de 前置詞句を伴う los libros de ella や la casa de ella のような文では、ella と libros (あるいは casa) は部分と全体の関係になっているとは言えない。

<sup>10</sup> 量化表現以外の形容詞も、\*sus grandes や \*nuestros bonitos のように容認されないが、これらの形容詞も註 9 と同様、部分と全体の関係にはなっていない。

<sup>11</sup> (34a) と (34b) が非文の理由は、通常頭 (cabeza) が一つしかないからという語の意味特性に帰属される (即ち、対象物が限定されていなければならぬ)。従って、以下の文は容認される。

(i) a. Me duele esta pierna.

b. Me duele una pierna.

従って、(34) で問題にされるのは与格所有詞ではなく直接目的語の cabeza の性質 (限定されていない) とも考えられる。

<sup>12</sup> Aquí tengo mi libro. のように動詞 tener が所有ではなく副詞 aquí によって随伴の意味を担う場合には (41b) は許容される。